

涉成園の空間的特質に関する研究  
— 利用形態と情景の変遷にみる時代性の考察 —

A Study on the Spatial Features of Shosei-en

— Consideration of Historical Characteristics Appeared in Utilization Patterns and Scenery Transition —

加藤 友規\* *Tomoki KATO*

VOL.77 NO. 2

August, 2013  
ISSN 1340-8984

# 渉成園の空間的特質に関する研究 — 利用形態と情景の変遷にみる時代性の考察 —

A Study on the Spatial Features of Shosei-en

— Consideration of Historical Characteristics Appeared in Utilization Patterns and Scenery Transition —

加藤 友規\* Tomoki KATO

## 1. はじめに

このたび授与された栄えある日本造園学会賞に際し、ご指導ご鞭撻いただきましてきた諸先生方並びに関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。

特に、恩師であり、学位論文の主査でもある尼崎博正先生には深く感謝申し上げたい。2007年4月、京都造形芸術大学に通信制大学院（修士課程）がスタートしたが、その一期生として入学を薦めていただいたことが本格的な庭園研究のきっかけとなった。入学時の、「現場を熟知している庭師の方にこそ、庭園研究を深めてほしい。庭師のあなたにしか、できない研究があるはずだ。」という恩師の言葉を励みにしながら、5年間、大学院に在籍して充実した研究に取り組むことができた。修士課程では南禅寺界限別荘庭園群の中でも名園として名高い何有荘を、博士課程では東本願寺の別邸である渉成園を採り上げたが、自分自身が出入りの御用庭師として作庭や維持管理に携わっている現場を大学院での研究対象にできることは大変幸せなことであった。副査の仲隆裕先生、中村利則先生、白幡洋三郎先生にも、改めて心より御礼申し上げます次第である。

また、今回の受賞に際しご検討くださった選考委員会の諸先生方をはじめ、審査に関して多くの時間と労力をいただいた学会事務局関係者の方々にも御礼申し上げます。

本研究を進める過程で、多くの方々のご理解とご協力を得ることができたことにも感謝している。大谷大学の木場明志先生をはじめ、真宗大谷派宗務所の近松誉様と山口昭彦様には様々なご教示とご配慮をいただいた。真宗本願（東本願寺）造営史に造詣が深い方々のご支援のもと、真宗大谷派所蔵の原史料を調査・分析させていただいたからこそ、本研究での論証と新知見の提示が可能となった。更に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の平澤毅様と青木達司様（現：文化庁文化財部記念物課）、日本文化研究会代表の坂井輝久先生からは、所蔵されている貴重な資料に関するご教示をいただいた。

庭師である私の研究論文が評価されたことは、全国各地

の現場で活躍される庭師の方々にとっても、有意義であると考えている。現場での造園技術の向上と共に、庭師であるからこそ体得できる感性と見識を活かしながら、日本庭園のもつ文化的価値、社会的価値を高めていくことも庭師の使命である。

お世話になった方々にここに重ねて深く御礼申し上げますとともに、報恩感謝の想いで更なる精進を誓う次第である。

## 2. 研究の背景・目的・方法

本研究は、渉成園の利用形態と情景の変遷を明らかにし、更には今日定型化された「渉成園十三景」と「煎茶三亭」の意義を解明した上で、渉成園の空間的特質にみる時代性を考察したものである。

まず、本研究に先立ち、渉成園に関する先行研究の概要と課題をまとめてみた。

渉成園が源融の河原院の跡地であるという重森三玲の説<sup>1)</sup>については、吉川需が文献史料に基づいた考察により否定し<sup>2)</sup>、森蘊や村岡正もそれを踏襲している<sup>3)、4)</sup>。更に、(財)京都市埋蔵文化財研究所（当時）の発掘調査により、吉川が推定した場所に河原院跡の庭園遺構が検出され<sup>5)</sup>、吉川の説の正しいことが立証された。一方、重森が論じた渉成園に「煎茶三亭」があるとする説<sup>6)</sup>については、疑義をはさまれることもなく今日まで定型化している感がある。また、村岡による古史料を考察した歴史的な研究や、尼崎博正による渉成園の水系の変遷に関する研究<sup>7)</sup>などがある。

上記の先行研究から、改めて渉成園研究における課題を整理すると、渉成園の利用形態や、頼山陽の『渉成園記』（文政10年・1827）<sup>8)</sup>で名高い「渉成園十三景」に象徴される情景の変遷に関する研究が未だに十分に解明されていないこと、更には、「煎茶三亭」のように、その是非が議論されないまま今日まで定型化している事柄があることが明らかとなった。

そこで、こうした先行研究における課題を踏まえ、再度渉成園の姿を捉えなおし、誤解釈の修正や新知見を加えた

\*1966年京都市生まれ、1990年千葉大学園芸学部園芸経済学科卒業、2009年京都造形芸術大学大学院修士課程修了、2012年京都造形芸術大学大学院博士課程修了・博士（学術）、現在 植彌加藤造園株式会社代表取締役社長

ものが本学位論文である。

本研究では、渉成園の利用形態と「渉成園十三景」に象徴される情景の変遷を考察した上で渉成園の空間的特質を明らかにするとともに、そこから読み取れるそれぞれの時代特有の庭園の個性、すなわち「時代性」を解明することと、先行研究から誤解釈され、今日まで定型化されている「煎茶三亭」の是非を解明することを目的とした。

研究方法としては、真宗大谷派所蔵史資料及びその他史資料を文献（地誌、随筆、詩歌、古記録）と絵図（風景画、挿図、指図）ごとに分類整理し、原史料と名所記等の刊本との性格の違いを踏まえて分析し、考察した。

### 3. 渉成園の利用形態

渉成園の利用形態は、時代の趨勢の中で変化してきた。創建後 100 年程は、古絵図<sup>9)</sup>に「御隠居御屋敷」(=御隠居御屋敷)と記されているように、住まいとしての利用形態が中心であったが、その後、『都名所図会』(安永 9 年・1780)では東御殿の略称である「東殿」と表現され、更に『都林泉名勝図会』(寛政 11 年・1799)で「渉成園」という庭園景観の雅称が登場し、市井一般にも「渉成園」という呼称が広まっていたことが明らかになった。

この「屋敷」から「御殿」・「渉成園」へという呼称の変遷は、住まいという機能を基本としながらも迎賓施設としての機能が付加され、その利用形態が色濃く反映されたことを示している。

迎賓施設としての利用形態を東西南北四つの門の違いに注目しながら「上檀間日記」等の古記録<sup>10)</sup>と頼山陽の『渉成園記』(文政 10 年・1827)に基づいて考察してみると、正客が南門、内容が北門、家臣らが西門というように、利用者による門の区別と利用形態の関係性が明らかとなった。文政 8 年(1825) 9 月 10 日の老中水野出羽守忠成を正客とした接遇の記録はその代表的な事例であり、迎賓施設としての利用形態からみる渉成園の空間的特質が窺えた(図-1)。

また、迎賓施設としての渉成園を見たとき、「上檀間日記」等からは、接遇の場所、場面、人物などに応じて煎茶と薄茶(抹茶)を使い分けて供していることが分かるが、一方で、文人煎茶を好んだ頼山陽の『渉成園記』からは、煎茶で接遇する庭園としての要素が色濃く記されている点も明らかとなった。

更に、真宗大谷派所蔵の『東御殿惣絵図』(安永 8 年・1779 以降)、『安政度枳殻邸絵図』(安政 5 年・1858 以降)、『枳殻邸現今絵図』(明治 17 年・1884 頃)の 3 点の指図(平面図)を採り上げ、建築空間と庭園空間をつづさに分析した結果、正客用迎賓施設、内容用迎賓施設、隠居屋敷という、渉成園独自の三つの領域性を明らかにすることができた。

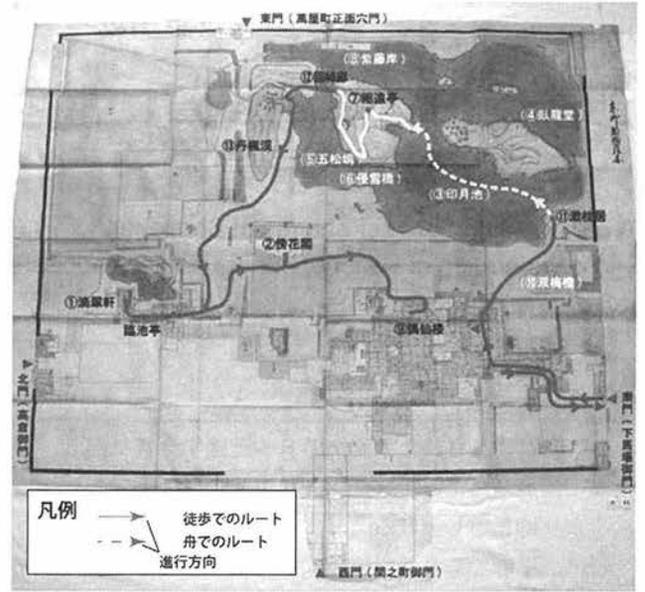


図-1 老中水野忠成の推定回遊経路(「上檀間日記」文政 8 年(1825) 9 月 10 日条に基づき『東御殿惣絵図』上に記入)

### 4. 渉成園の情景の変遷—「渉成園十三景」に着目して—

ここでは「渉成園十三景」の基本的事項として「景」や「境」について考察した上で、渉成園に関する文献史料及び絵図史料を用いて、「渉成園十三景」の成立と情景の変遷を詳細に検証した。

澄月の『渉成園景趣』(寛政 6 年・1794)<sup>11)</sup>以降、文人墨客らが渉成園の景物を題材として詩歌を詠むようになるが、18 世紀までは、「渉成園十三景」の 13 箇所景物が特定されるには及んでいなかったことが窺えた。

そして、19 世紀に入り、村瀬栲亭の『渉成園十三勝』(文化 10 年・1813)<sup>12)</sup>以降には、「渉成園十三景」の 13 箇所景物が特定されるようになる。今日受け継がれている「渉成園十三景」は、東本願寺にとっても節目の年である、文化 8 年(1811)の親鸞聖人五百五十回御遠忌とそれに先立つ境内や渉成園内の整備を一つの契機として成立したものと考えられる。そこから渉成園は、名園としての地位を確立し、文化交流の場として隆盛を極めていったのである。

### 5. 渉成園の定型化された空間的特質

#### —「渉成園十三景」と「煎茶三亭」—

「渉成園十三景」は、渉成園の名園化を希求する人々の想いの結晶として成立した後、頼山陽の『渉成園記』(文政 10 年・1827)の伝播にみられるように、今日までの約 200 年間、定型化され大切に受け継がれている。

一方、「煎茶三亭」の考え方の成立と伝播の経緯を調査したところ、売茶東牛の作為『煎茶綺言』<sup>13)</sup>(万延元年・1860)と史料の誤解釈から定型化されてきたものであることが判明した。後に重森がその著作・研究などで述べていた「煎茶三亭」の是非は、渉成園研究の大きな課題の一

つであったが、これが史料分析の誤りなどから導き出された誤解釈であることが本研究によって明らかになった。

すなわち、両者は、同じ定型化された空間的特質として今日認識されていても、その本質的な意義は全く違っているのである。

## 6. 涉成園の空間的特質にみる時代性

涉成園の空間的特質を検証する過程で明らかとなった時代性、そこには涉成園という庭園の本質が存在すると考える。涉成園の時代性は、以下のように、大きく三つに区分することができた。

### (1) 第Ⅰ期

竣工（明暦3年・1657）から親鸞聖人五百回御遠忌（宝暦11年・1761）頃までの約100年間に該当する。この時期は、住まいとしての利用形態を有していたものの、迎賓施設として利用されていたかどうかを実証できる史料が確認できず、その解明は今後の課題であるといえる。

### (2) 第Ⅱ期

親鸞聖人五百回御遠忌頃から「禁門の変」（元治元年・1864）までの約100年間に該当する。住まいとしての利用形態を基本にししながら、迎賓施設としての利用形態を併せ持った涉成園の空間的特質が窺える時期である。

この時期は、前半50年を「黎明期」（第Ⅱ-1期）、後半50余年を「黄金期」に区分でき、更に「黄金期」は、「ソフトの黄金期」（文化交流の場としての黄金期：第Ⅱ-2期）と「ハードの黄金期」（庭園施設の黄金期：第Ⅱ-3期）に分けることができる。

指図では、『東御殿惣絵図』に描かれている情景が「黎明期」及び「ソフトの黄金期」に、『安政度枳殻邸総図』に描かれている情景が「ハードの黄金期」に相当する。

空間構造の面からは、「黎明期」においては、庭園と建築が一体となって複合的に利用されるという表向の空間構造の特徴がみられた。「ソフトの黄金期」と「ハードの黄金期」においては、①正客用迎賓施設（建築群南東側と「涉成園十三景」を中心とした庭園の大部分）、②内容用迎賓施設（建築群北側の滴翠軒周辺）、③隠居屋敷（建築群中央部と西側）という三つの領域性を確認することができた。すなわち、住まいとしての利用形態を基本にししながら、迎賓施設としての利用形態を併せ持つという、この時期独特の空間的特質に基づく時代性が明らかになった（図-2）。

#### i) 第Ⅱ-1期（仮称：「黎明期」）

親鸞聖人五百回御遠忌頃から、親鸞聖人五百五十回御遠忌（文化8年・1811）頃における「涉成園十三景」の成立までの約50年間に該当する。

宝暦11年（1761）に記された冷泉為村「東六条本願寺御遊覧御詠」<sup>14)</sup>をはじめ、庭園での遊興が確認されるようになる時期で、「涉成園十三景」が成立していく黎明期



図-2 利用形態からみた涉成園の空間構造  
（『安政度枳殻邸総図』上に記入）

に相当する。住まいとしての利用形態を基本的に保持しつつ、迎賓施設として利用され始める時期である。

#### ii) 第Ⅱ-2期（仮称：「ソフトの黄金期」）

親鸞聖人五百五十回御遠忌（文化8年・1811）頃における「涉成園十三景」の成立から、「安政の大火」（安政5年・1858）までの約50年間に該当する。

住まいとしての利用形態を基本にしながらも、迎賓施設としての利用形態が色濃く反映してくる時期である。「涉成園十三景」の成立によって、庭園での遊興や文化交流が隆盛を極めた時期である。

#### iii) 第Ⅱ-3期（仮称：「ハードの黄金期」）

「安政の大火」（安政5年・1858）後の復興から「禁門の変」（元治元年・1864）までの約6年間に該当する。

涉成園は、「涉成園十三景」の成立と共に名園化が達成され、「ソフトの黄金期」を迎えたが、「安政の大火」によって、殿舎や景物などを焼失してしまう。しかし、3年後の親鸞聖人六百回御遠忌（文久元年・1861）を厳修するため、施設面での復興を早急に成し遂げた姿が「ハードの黄金期」の涉成園であったといえる。

以上のように、災禍を境として、二つの黄金期が存在することが第Ⅱ期の特徴であるといえる。

### (3) 第Ⅲ期（仮称：「伝承期」）

「禁門の変」（元治元年・1864）後から現在までの約150年間に該当する。

迎賓施設としての利用形態が薄れ、庭園施設として「涉成園十三景」が揃わないにもかかわらず、定型化された「涉

成園十三景」が伝承される時期と位置付けられる。また、売茶東牛の作為から生み出された「煎茶三亭」が、重森の誤解釈によって定型化されていた期間でもある。

## 7. おわりに 渉成園の空間的特質

### －【「渉成園十三景」の成立と定型化】－

「渉成園十三景」は渉成園の名園化を希求する人々の想いの結晶として成立した。こうした名園化の意向は、頼山陽が『渉成園記』を撰した文政10年(1827)以前からも随所に窺える。

文政6年(1823)には、雲華が詩歌の中で「渉成園十三景」を称揚している<sup>15)</sup>。“十三光景雲泓を繞る 一草一木 来歴有り 一花一葉 皆な榮に向かう”，また，“十三風景を列ね 二百星霜を歴る 樹は古び園は趣を成し 花は新たに水は香を帯ぶ”と記すなど、200年の永き歳月の中で趣を増してきた「渉成園十三景」を称えているのが分かる。

文政8年(1825)には、老中水野忠成の接遇により、渉成園の整備の必要性が認識され、翌文政9年(1826)に東本願寺家臣団により『枳殻御殿古実』<sup>16)</sup>が編纂され、渉成園に関する伝承がまとめられた。しかも、その『枳殻御殿古実』には、従前に作成された『枳殻御殿古之記』<sup>16)</sup>とは異なり、「渉成園十三景」の存在を称揚する新たな記述が顕著に認められた。

そして文政10年(1827)は、「ソフトの黄金期」として最も象徴的な出来事が相次ぐ。文化10年(1813)10月14日に詠んだ村瀬栲亭の『渉成園十三勝』の原本が文政6年(1823)の山内出火の際に焼失してしまうと、第20代達如上人は栲亭の弟子の石川竹崖が栲亭の書法を伝授していると聞き、栲亭の書の復元を所望した。文政10年(1827)9月15日、竹崖は師匠栲亭の『渉成園十三勝』を書き改めて達如上人に進呈している<sup>17)</sup>。

さらに、同年11月5日、頼山陽は執筆を依頼された『渉成園記』を浄録する。『渉成園記』には、“而使布衣頼襄之”(而れども布衣頼襄をして之れを記さ使む)とあり、また、同年8月、大窪詩仏の「東本願寺渉成園十三勝」<sup>18)</sup>にも、“東本願寺上人属作渉成園十三勝詩”(東本願寺上人に属され、渉成園十三勝詩を作る)として、東本願寺の宗主達如上人から依頼されたことがその詩歌の序文に記されている。なぜ、頼山陽や大窪詩仏や石川竹崖が執筆を依頼されたのかは明白で、そこには渉成園の名園化を希求する東本願寺の意向が窺えるのである。

「ソフトの黄金期」の渉成園では、「渉成園十三景」の成立とその後の『渉成園記』などにみる文人墨客の活躍により名園化が達成され、迎賓施設の場として隆盛を極めた。多くの来訪者に賞賛される中で、渉成園の象徴的存在としての「渉成園十三景」が今日まで受け継がれていく定型化の骨格が築かれたといえよう。ここに、渉成園の空間的特

質として、渉成園という庭園の本質が顕現している。

時代性の中でも最も重要な時期である「ソフトの黄金期」にみられる【「渉成園十三景」の成立と定型化】にこそ、渉成園という庭園の本質がある。親鸞聖人五百五十回御遠忌(文化8年・1811)という東本願寺の歴史の節目である時期と軌を一にして、渉成園の名園化を希求する人々の想いが「渉成園十三景」を成立させ、定型化させていったのである。

それから200年の歳月を経た平成23年(2011)には、親鸞聖人七百五十回御遠忌が厳修された。今日においても「渉成園十三景」は渉成園の空間的特質の象徴として定型化され、大切に受け継がれているのである。

## 参考文献及び注

- 1) 重森三玲『日本庭園史図鑑』第1巻(有光社, 1938), 『近畿名園の鑑賞』(京都書院, 1946) など
- 2) 吉川需「河原院庭園に就て」, 『造園雑誌13(2)』(1950) 所収
- 3) 森蘊「東本願寺別業渉成園について」, 『大和文華』第8号(1952) 所収
- 4) 村岡正「渉成園の歴史」, 『造園の歴史と文化』(養賢堂, 1987) 所収
- 5) (財)京都市埋蔵文化財研究所『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(1996)
- 6) 『日本庭園の鑑賞』(スズカケ出版, 1935) が初見と思われ、以後、『日本庭園史大系』第2巻(思想社, 1974) 等にも記述されている。
- 7) 尼崎博正「渉成園の成立過程と水系の変遷」, 『庭園学講座X 文化財庭園の保存管理技術』(京都造形芸術大学日本庭園研究センター, 2003) 所収
- 8) 『渉成園記』については、多くの刊本が出ているが、本研究では、影印本である『和漢名家習字本大成』第6巻(平凡社, 1933) 所収のものを主に参照した。
- 9) 真宗大谷派所蔵の『東本願寺御境内町絵図』(元文5年・1740), 『東本願寺寺内絵図』(明和9年・1772) など
- 10) 古記録については、宗学院編集『東本願寺史料』全4巻(1939～1943)を参照した。
- 11) 兼清正徳の『澄月傳の研究』(1983)ならびに、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に所蔵される村岡正の残した資料類、通称「村岡文庫」を参照した。
- 12) 前掲「村岡文庫」を参照した。
- 13) 本研究では、愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫に所蔵されているものを主に参照した。
- 14) 前掲「渉成園の歴史」では、単に「園記」としているが、ここでは津村正恭の『片玉集』(寛政12年・1800) 所収の題名を使用した。
- 15) 赤松文二郎『雲華上人遺稿』(1933) 所収
- 16) いずれも真宗大谷派所蔵本を参照した。
- 17) 前掲「村岡文庫」に記された石川竹崖の跋文を参照した。
- 18) 大窪詩仏『詩聖堂詩集』第二編(文政11年・1828) 所収